

37 石川依平（よりひら）・伊藤嵐牛（らんぎゅう）の学問と

地域の人々の学び

筆 者 久保田 陽代

初めに

事務長

東山口は掛川市の東部（事任八幡宮以西）に位置する地域である。

平成 27 年（2015 年）この地八坂で、伊藤嵐牛のご子孫、鋼一郎氏の提唱で「嵐牛友の会」が発足した。専門家を招いて古文書を読み解き、嵐牛の功績を知り、専門家の手により文献にまとめ上げることが目標であった。

また平成 30 年（2018 年）には、東山口学習センターを基点に、センター事務長服部光子氏主催による「東山口を知る会」が発足した。こちら東山口各地に伝わる伝承や碑・古文書を元に、服部氏・岡本春一氏ら、古文書読解の名手たちが、地域に眠る宝を掘り起こしてくださるという貴重な機会であった。

不勉強な私は、古文書を前に宇宙人になったような気分で一方的に話を聞くだけであったが、それでも会に参加を重ねていくうち、何かが引っかかるようになってきた。

それは、「この地は文化の谷間である。」という言葉の真偽であった。つまり、この地は東京と大阪のほぼ中間地帯（江戸と京の真ん中）、静岡と浜松の中間地帯、どちらの文化からも影響が薄くなり、つまり…文化は花開かず、もっと悲観的に根暗に受け止めると、学力も低いと言われているのか、子ども心に傷んだものである。

本当にそうだろうか。歴史から学んで見えるものはないだろうかと考えた。

そして、前述の二つの会を通して、郷土の文人「石川依平」「伊藤嵐牛」らの働きが「松島十湖」を経て、江戸末期から明治・大正・昭和の時代に渡って、この遠江地域の人々の奉額俳句の文化を広めたのではないかと仮説を立てた。

「石川依平」は江戸末期東山口伊達方の生まれ、幼いころより和歌に親しみ、京都冷泉家に学び、帰郷後は国学者として、また歌人として多くの門弟を指導したことで知られる。

また、「伊藤嵐牛」は、同じく郷土の文人で芭蕉の流れをくみ、俳諧に親しみ、やはり多くの門弟を指導したと聞く。（ちなみに、明治時代の正岡子規以前、俳句は俳諧と呼ばれている。）

この二人の生涯を並べてみると、ほぼ同時期に東山口伊達方地区で生まれ育っている。時は幕末、封建制度の揺らぎが見え始めている。疲弊した農村では、あの二宮金次郎の報徳思想も生まれた時期と重なっている。

この二人は当時の遠江の地に何らかの影響を及ぼしているのではないか。

遠江の村里のあちこちにある小さな神社には、人々が捧げた俳諧の額が残っていることが多い。文人たちの活動は、民衆の学問熱とかかわりがあるのだろうか。

江戸末期、ほぼ時代を同じくして活躍したこの人たちは、何を思いどう表現したのか、そしてその思いは、その後の人々の暮らしや学問にどう結びついていったのか。地域の人々の思いを押し上げた時代背景や、地域の特徴とはどんなものだったのだろうか。

以下は、いくつかの文書や人々の話をもとに調べた私見である。

1, 国学者・歌人 石川依平

石川依平は、寛政3年（1791年）遠江国佐野郡伊達方村（現在の掛川市伊達方）に生まれた。通稱為蔵のち惣太夫、名は方救（よりひら）、号を柳園・樞が本（かしがもと）と言う。

家は父祖3代87年間大庄屋だったが、家運が傾き、父重隆は寛政元年（1789年）大庄屋を辞め長屋住まいをしている。この父重隆や祖母は和歌をたしなみ、それは依平にも影響を与えていた。

依平は幼い時から歌を詠み、6歳の時掛川城に召されたり（註①）、7歳の時、大和郡山侯や有栖川の姫君に歌を奉ったりして（註②）、神童ぶりを世にもてはやされた。が、本居宣長などはこれを「野狐の所為」（やこのせい）と呆れたという。

9歳の時、郡山侯の紹介で冷泉為章（れいぜいためふみ）の門人となった。京の歌道の旧家で歌の基礎を学ぶ機会が得られたのである。

幼いころから子ども離れした和歌を詠んだ依平であるが、17歳の時出会った本居宣長の「玉霰」によって国学の道にめざめ、9年間世話になった冷泉家に別れを告げ帰郷する。

18歳の時、依平は、東遠（現在の菊川市中内田）の栗田土満（ひじまろ）に入門した。この栗田土満は、賀茂真淵・本居宣長の流れを汲み東遠で活躍した重要な人物である。土満は国学の基礎である古事記の解明に尽力し、依平のよき師であった。

依平はよき師に恵まれ、学び、国学者として多くの門人の指導にあたる。

23歳の時には、宣長の子本居春庭（はるにわ）に入門、国学の道を究めている。

地域では、組頭や丁場役（ちょうばやく）を務めながら、門弟を指導し、28歳の時、賀茂真淵50年祭の発起人補助となり、44歳で県居翁霊社（あがたいおうれいしゃ）建設の願主となるなど、西遠の高林方朗（みちあきら）を助け、国学の普及に努めた。

歌文集「柳園詠草」等を残し、安政6年（1859年）69歳で亡くなった。註③

註① 霜月夜 山のはの梢あらはにをく霜の影も消へ行く冬の夜の月 他

註② 宇津の山 吹く風の音もはげしくうつ山木の葉にうづむ蔦の細道

冬 恋 思ひきや細谷川の薄氷とけても袖のぬれまさは

（国学者・歌人「石川依平」岡本春一著 p29・4行目、p30・3行目・14行目より）

註③ 浜松市賀茂真淵記念館平成24年度特別展「東遠の国学者・歌人・石川依平」資料4枚目記事より

国学者・歌人「石川依平」岡本春一著 p26～p38 参照

依平は単に国学や和歌の道を究めただけではない。学問の庶民化と和歌の普遍化に寄与したという。

「国学者・歌人『石川依平』」を著した岡本春一氏は次のようなエピソードを著している。

〈歌のことで再度上京した依平のことをいぶかしがって、近所の人が「依平様歌というものは大変むつかしいものでござんしょうね。」と伺った。依平は即座にいつもと変わらぬ対応で、いや、歌というものは貴女が今言ったことはもう既に歌になっているんですよ、いいですか「この頃の君はいずこにましませし暫くお目にかからざりけり」といとも簡単に五七五七七に並べて教えてくださったという。〉

このような依平の元には 300 人前後の門人がいた。東山口のもう一人の文人、伊藤嵐牛も依平から学んでいる。この石川依平と伊藤嵐牛の関りを当時の時世と並べて年表に表してみた。共に小笠山に出かけるほどの間柄である。資料①別紙

2, 俳人 伊藤嵐牛

伊藤嵐牛〔寛政 10 年（1798 年）～明治 9 年（1876 年）〕は、掛川市八坂に生まれた。本名は豊蔭、通称は清左衛門。石川依平の元で、国学・和歌を学んだ。

文政 8 年（1825 年）28 歳の時、芭蕉の流れを汲み、当時俳壇の雄であった三河の俳人鶴田卓池に入門、毎日 100 句ずつ作り、飛脚で作品を送り、添削してもらい、また飛脚で届けてもらったという。

57 歳にして初めて門人を受け入れる。門人は浜松より静岡まで及び、その数は 300 人余となった。嵐牛は雪中庵系が中心であった地方俳壇の中で清新な指導者となり、遠州一円の第一人者となった。

「俳諧は太平の余波（なごり）、句を作るより田を作れ」が口癖で、本人も毎日鍛冶を良くつとめ、その後俳句の勉強、門人の指導に当たった。

晩年、白童子と号し、柿園は長男洋々が継ぎ、後に白童子は門人松島十湖に譲った。

（以上註④新田慎一・服部光子共著「遠州三十三観音霊場巡りと奉額俳句・奉納連歌解説」p 5 上段 16 行目～下段 5 行目より）

前述の「俳諧は太平の余波（なごり）、句を作るより田を作れ」という言葉通り、嵐牛は生活者として堅実だったことがうかがえる。

江戸時代末期、封建制度の屋台骨が揺らぎ、日本の古典「古事記」「万葉集」等へ遡り精神性を明らかにする学問（国学）が盛んになり、また、二宮尊徳の登場にもみられるように、農村の疲弊・報徳仕法の誕生、外国からの圧力など、日本が揺れ動いている時期である。

嵐牛は経済基盤としての家業をおろそかにせず、その生活の中にある出来事を清新な目で生き生きととらえ、句に表している。また、小さきもの・生き物への慈しみの目もその句に表れていると思われる。

以下は、嵐牛の句の一部であるが、解釈の参考にまとめてみた。資料②別紙
註⑤「柿園嵐牛俳諧資料集」加藤定彦・倉島利仁編著 嵐牛俳諧資料館 p30～p170

3, 伊藤嵐牛から松島十湖へ

嵐牛の数多い門人の一人に、松島十湖がいる。〔嘉永 2 年（1849 年）～大正 15 年（1926 年）〕遠江国中善地村（現在の浜松市東区豊西町）に生まれる。

15 歳で俳諧を栩木夷白（とちぎいはく）に学び、栩木死後は伊藤嵐牛に師事した。書・法典・国学・報徳思想なども学び、明治元年・5 年には報徳社を結成している。明治・大正の時代に、第二の芭蕉と言われ、全国に多くの門人を持った。

そして、この十湖がこの地の奉額俳句の文化に大きく関わってくる。

4, 遠江三十三番観音霊場と奉額・奉納連歌の文化

西国三十三番観音霊場の成立は平安時代と言われる。その後、坂東・秩父などに設立された。遠江三十三番観音霊場は 1600 年代から 1700 年代と言われるが、民衆の強い観音信仰に支えられ、今に至っているという。

遠江三十三番霊場は、北は粟ヶ岳・居尻、東は東山・島田、南は菊川市（旧小笠町・大東町）西は袋井・森まで広がっている。

「遠江三十三番観音霊場巡りと奉額俳句・奉納連歌解説」を新田氏と共同で著した服部光子氏によると、人々は観音様に喜んでいただくために俳句を奉納したそうである。

その御著書を読み進めていくと、俳句という形で観音信仰にかかわった人々の熱さが伝わってくる。奉額の年代は文化 10 年（1813 年）から昭和 30 年（1955 年）まで続き、明治時代が一番多い。ただ、時代の波により、奉額俳句は、様々な事情によりすべての霊場に残存しているわけでもないようだ。

ここでは、比較的保存状態がよく句数も多い東山口地区の霊場 2 か所について記載する。

第 18 番新福寺〔曹洞宗〕（掛川市逆川 149）奉額年代明治 42 年（1909 年）選者はあの松島十湖（嵐牛の門人）である。

峠から見てさえ高き雲雀かな	伊達方	帯雪
白菊や折り戸の外ハたそがるゝ	家代	東湖
香の動く程は風あれ菊日和	伊豆	楽天

など 90 句が解説されている

投句者の住所は、上記以外に、満水・さか川・大原子・掛川・平川・西山口・大池・原谷・細田・曾我・長谷・八坂・大野・水垂・初馬・くらみ・上西郷・上内田・中内田・西方・なるたき・越中・東山・西浅羽・本所・磐田郡・千羽・本郷など実に多彩である。

次に第 19 番明照山慈明寺〔曹洞宗〕（掛川市小原子 134）奉額明治 40 年、やはり選者は松島十湖である。

伏し拝む社の上や風かほる 水垂 春月
七夕やはじめてみたる嫁の筆 本所 喜月
世の秋をみとめた振りの案山子哉 中村 浮月 など句数 91

こちらにも投句者には、前述のほかに、東京・横地・高御所・川崎・静波・六郷・潮海寺・板沢・富田・石上・小貫・加茂・安養寺・杉谷・吉沢・篠場等の地名が記載されている。実に多くの地域の人々が参加している。

註⑥ 以上 3・4 の項は、「遠江三十三番観音霊場巡りと奉額俳句・奉納連歌解説」新田眞一・服部光子共著 p4、p5、p14、p39～p46 参照

5，終わりに

これらはほんの一例である。俳句は座学とは言え（吟行もあるが）共に学ぶ場を得て、人々は五七五に様々な思いをこめて作句したのでろう。

この言わば生涯学習のような学びの場・思いの発露の場は、依平や嵐牛、十湖といった学問の基礎を積んだ人々がいて、その学問を一部の専門家のものだけにせず、惜しみなく民衆の学びに繋げていった結果であり、その功績はとても大きいと思う。

依平・嵐牛・十湖たち自身は、いうまでもなく、常によき師を求めて学び続けていた。

はじめに戻ろう。この地は文化の谷間ではなかったと思う。それどころか、笑顔になったり首をかしげたり、多くの人々と関わりながら学ぶ当時の人々の姿が浮かぶ。

もちろん、明治 20 年代後半になり、正岡子規の近代俳句の流れも気運を後押ししたかと想像される。

当時、この地で豊かな文化が花咲かせていたことを思い起こすだけで楽しい。今の私たちに通ずる感覚が共有されるからである。

これらの文化は持続してこそ価値は高まる。その点では、今を生きる私たちが何をなすべきか問われているのだらう。

これら、地域の宝を掘り起こし緻密な検証をしてくださった、服部氏・岡本氏・伊藤氏ほか東山口の諸氏に感謝したい。そしてこの宝を糧に、私たちなりの学びを深めていきたいと思う。

掛川の歴史探求フォーラム資料①

依平・嵐牛・報徳の流れ

2016，4，14 記

2022，12，20
改訂

西暦	年号	依平	嵐牛	報徳	備考
1783	天明 3 年				天明の大飢饉
1787	天明 7 年			二宮金次郎出生	

1789	寛政元年	父重隆大庄屋辞す			
1791	寛政3年	依平出生（幼名亀蔵・のち為蔵）		5歳 酒匂川決壊 所有田地の大半消失	本居宣長「玉霰」
1792		方救と名を改める			ロシア使節来航
1795	寛政7年	5歳 初めて歌のよ うなものを詠む			
1796	寛政8年	6歳 8月日坂八幡 宮へ奉額 10月掛 川城へ召される			
1797	寛政9年	7歳 有栖川姫宮御 宿に召され「冬恋・ 寄鶴祝」詠む			本居宣長「野狐の しわざ」という イギリス船来航
1798	寛政10 年		伊藤嵐牛（豊蔭） 出生	12歳わらじ推譲の 逸話	本居宣長「古事記 伝」
1799	寛政11 年	9歳 冷泉家入門 父と上京			
1800				14歳 父利右衛門 没	
1801	享和元年			極貧の恥辱 迎春 の用意できず	本居宣長没 72歳
1802				16歳 母よし没 伯父万兵衛宅に寄 宿	掛川藩 北門に藩 校
1803	享和3年	「東海道人物誌」に 為蔵 13才歌人と掲載		17歳 捨て苗から 1俵得る 積小為 大	
1805	文化2年			二宮七左衛門方に 住み込む 余暇に 廃田復旧・耕作	
1806	文化3年			20歳 生家近くに 小屋を建て住む 俳句	
1807	文化4年	宣長の「玉霰」を読 んで感動			
1808	文化5年	18歳 栗田土満に 入門 方救を依平と 改名			

1809		伊勢参拝			
1810				24 歳 田地 1,46 ha	
1811				25 歳 小田原藩家老服部家の若党となる	栗田土満没 75 歳
1813	文化 10 年	そのと結婚 本居春庭へ入門			杉田玄白「蘭学事始」
1817	文化 14 年	一般人の門人受け入れ			
1818	文政 1 年	28 歳 賀茂真淵 50 年祭発起人補助		32 歳 服部家立て直しを始める	
1819	文政 2 年		22 歳家業を継ぐ		
1821					内山真龍没
1822				36 歳桜町領復興を命ぜられる	
1823	文政 7 年	33 歳 養子加納小三郎（依隆） 8 歳			
1824		組頭を引き継ぐ			関東地方凶作 異国船打ち払い令
1825			28 歳三河卓池に入門		
			長男清一郎生まれる		
1826		妻その没 37 歳			
1827	文政 10 年	37 歳伊藤豊蔭とともに小笠山詣で	30 歳 依平と小笠山詣で		
1828		38 歳 養子依隆没 14 歳			
1829	文政 12 年	39 歳 組頭辞退	32 歳依平に入門		
1830	天保元年	40 歳 門人増える			
1831	天保 2 年	豊蔭（嵐牛）家にて当座（歌会） 41 歳 後妻いま娶る 29 歳	依平より国学を学ぶ		8 月慶雲寺火災

1832		門人多し50人 武家20人			
1833	天保4年		36歳 月並句合や奉額句合に句がのる	47歳凶作を予知して対策を講ずる	天保の大飢饉 各地に一揆打ち壊し
1834	天保5年	縣居靈社設立願主の一人となる			水野忠邦老中 十返舎一九没
1835	天保6年	45歳 丁場役		農村復興事業に着手	
1836				50歳 報徳訓出来る 鳥山藩に救急援助	諸国凶作
1837				51歳 小田原領の飢民救済	大塩平八郎の乱
1838	天保9年	養子 豊平			
1839	天保10年	50歳 長女やぎ出生			
1840	天保11年	51歳 伊藤豊蔭がもとへ行く 5月兼題 郭公			
1841				諸領諸家の指導	天保の改革
1843	天保14年		47歳磐田医王寺に芭蕉句碑建立	57歳 小田原報徳社創立 尊徳と名乗る	天保の改革失敗 忠邦失脚
1844	天保15年弘化元年	次女むろ出生 養子 豊平に農事を習わす	磐田医王寺境内に嵐牛筆芭蕉句碑を立てる		
1845				59歳 相馬藩の農村復興事業	八木美穂 横須賀藩講師
1846	弘化3年			倉真村に報徳の教えが広まる	
1847	弘化4年	慶雲寺再建世話人 次女むろ没			
1848	嘉永元年		51歳柿園評月並句合		
1850				64歳 管内14ヵ村に復興事業を行う	

1851	嘉永 4 年	為蔵改め惣太夫を名乗る	未製本俳書『早緑集』		
1852	嘉永 5 年	養子豊平を離縁			
1853		後妻いま没		日光領復興事業受命	ペリー来航
1854	嘉永 7 年 安政元年		57 歳 本格的な宗匠活動開始	轟村復興着手 岡田良一郎入門	11 月安政東海地震
1855			58 歳 先妻没		
1856	安政 3 年	婿養子金谷河村為一郎を迎える	『そのまま集』初編 柿園社中の年次集刊行 59 歳	7 0 歳 10 月没	
1857			年次集刊行		
1858			年次集刊行		安政の大獄
1859	安政 6 年	6 9 歳 依平没			
1861			年次集刊行		
1864			年次集刊行		
1870	明治 3 年		拾山と大竹家に連泊		
1871	明治 4 年		『そのまま集』 6 編		
1874			77 歳 後妻没		
1875			78 歳、松島十湖らに最後の連句を指導	岡田佐平治 遠江国報徳社を発足させる	
1876	明治 9 年		5 月 7 9 歳にて没		
1880	明治 1 3 年		平台編『嵐牛発句集』		

参考文献

国学者・歌人石川
依平

柳園詠草について
(資料)

なるほどなっとく
金次郎さん

よみがえる二宮金
次郎

岡本春一

高松亮太

掛川市教育委員会

榛村純一

東山口を知る会

2021・1・16

伊藤嵐牛俳諧鑑賞（私見）

資料「柿園嵐牛俳諧資料集」

加藤定彦・倉島利仁 編著

（嵐牛俳諧資料館）より抜粋

に

ひく先に夕雲かゝる鳴子哉

1、堅実な生活者としての目

隣には雨なり庵のはつしぐれ

「靱むしろ早う引入よ、藁つみてよ」とのゝしる声の聞える

茶畑にすそひく富士や神無月

大根のきざみ膾（なます）や蔵びらき

若い手に肩たゝかせて冬籠

織て着てつくりて喰うて御代の春

苗代やどうならべても色紙形（なり）

2、生きてるものへの慈しみの目

百舌の尾や遠目楽しむ捻りぶり

いつそ我ふとんへはひれきりぐ（ぎり）す

みのむしや小春の花にあふ梢

隼や暮かゝる江を一文字

3、研ぎ澄まされた感性

豆腐きる薄刃にひゞく氷かな

きりぎりす片隅くらき机かな

村中へ咲うつりけりうめの花

立秋や膳は茄子のひと夜漬

久保田陽代 記